

平成27年度第1回福島県総合教育会議 議事録

1 日時	平成27年5月15日（金）午後3時～午後4時16分
2 場所	杉妻会館 牡丹
3 出席者	知事 内堀 雅雄 教育委員 高橋 金一 小野 栄重 佐藤 有史 浅川なおみ 教育長 杉 昭重 その他（議題3のみ 関係者として参加） こども未来局長 尾形 淳一 文化スポーツ局長 篠木 敏明
4 議事内容及び経過	
（1）開会	事務局より蜂須賀禮子委員の欠席について報告。
（2）知事あいさつ	【知事】 お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。 第一回の総合教育会議の開催となる。 最近、県内の子ども達と直接接する機会があった。ふたば未来学園高校の開校式では、故郷の近くで復興の役に立つ人間になりたいと学生が語ってくれた。会津では、元気な幼稚園、小学生達とふれ合った。中通りでは、様々なジャンルで日本一となった高校生達と話す機会があり、部活動や進路について堂々と述べていた。四年前の震災、原子力災害を乗り越えて、たくましく立派に成長している若者や子ども達の姿を見て、私たち自身が福島の子どものための教育のために頑張らなければならないと実感した。 今回、国の制度変更に伴ってスタートするこの会議は、福島県が原子力災害、震災を乗り越えて若者の未来を形づくっていくために非常に重要な場である。県教育委員会と知事部局の連携を深めて、一体となって、子ども達のために、未来のために、様々な施策を展開していきたいと考えているので忌憚のない意見をお願いしたい。
（3）議題1	<会議運営規程について> 福島県総合教育会議の運営規程について、事務局である政策調査課長より資料1-1に基づき説明があり、全員異議なく原案のとおり決定した。

(4) 議題2

<大綱について>

福島県における教育、子育てにかかる大綱について、事務局である政策調査課長より資料2-1及び資料2-2に基づき、福島県総合計画「ふくしま新生プラン」第3章〔ふくしまの礎〕人と地域が輝く“ふくしま”(1)子ども・子育て、(2)教育、(3)文化・スポーツ、人々の活躍の場づくりをもって大綱に位置付ける旨の説明があり、以下の意見交換の後、全員異議なく原案のとおり決定した。

【教育長】

教育委員会では、ふくしま新生プランに基づいて第6次の福島県総合教育計画を策定している。また、今年度はそれに基づいたアクションプランを策定しており、これらが今後教育を進めていく上での基となるので、福島新生プランの該当部分を大綱として位置付けるべきである。

【知事】

ふくしま新生プランの該当部分を大綱に位置付けることにより、ふくしま新生プランにより重み加わることとなる。中身を見ると具体的な指標もある。こういったものをしっかり形にしていくことが私たちの大事な責務であると考えている。

(5) 議題3

<教育、子育てにかかる連携について>

知事より、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第一条の四第5項に基づき、意見を求める関係者として、福島県子ども未来局長及び文化スポーツ局長の出席について提案があり、全員異議なく了承される。

資料3-1、資料3-2及び資料3-3に基づき、教育長、子ども未来局長、文化スポーツ局長が説明を行った後、以下のとおり協議、意見交換を行った。

【知事】

意見など順次発言をお願いします。

【教育委員】

地方教育行政の法律が変わり、大綱ができるということで、具体的にどのように進めていくのか関心があって本日の会議に臨んでいる。

一番大事なことは、大綱や具体的な連携について皆さんに周知し、理解いただくことだと思っている。できる限り周知を徹底していただければと思う。

子育てと教育については、両輪にならないと進んでいけないと思っている。会津藩の歴史を見ると天明の大飢饉の後に田中玄宰が日新館をつくった。福島県もふたば未来学園高校が開校して、まず新たな一歩が踏めたと思っており、双葉地区だけでなく福島県全域での教育に力を入れていくことが肝要だと思う。

会津にいと大人は風評があるという意識はあるが、子ども達は認識が薄い部分があると実感している。震災に関しての復興教育は常に伝え教え続けなければならないと思っている。やがて子ども達が外に出たときに、先入観や誤解や偏見があった中で、どう乗り越えていくか、その壁を乗り越える時に親や学校が寄り添う、大人になってからも周りの人が手助けしてあげる仕組みづくりができていけば、復興に関わる教育ができるのではと思っている。

郷土愛を育むふくしまを目指して連携しながら、進めていければと考えている。

【教育委員】

資料3-1の幼稚園教育の充実に関して、幼稚園関係の方の話を伺うと、多様な教育を行っている幼稚園では、ある程度子どもへの教育を進めている所があり、小学校に入学すると既に理解していることを一からやり直すようなことがあるという。義務教育という面があると思うが、幼稚園では既にそれ以上のことをやっている所がありギャップを感じている方もいる。その辺を理解し合いながら進めると良いのではないか。

資料3-2の子どもの貧困対策に関して、貧しい人たちを救おうという風潮があるが、貧しいけれども頑張ろう、子どもの教育はしっかりやろうという姿勢が崩れているとも感じる。そういう姿勢が世の中全体に足りなくなっているのではないか。

資料3-3の中高生によるミュージカルの創作では、5月の研修に私自身参加して、その様子を見させていただいた。非常にいい企画だと思っている。その中で感じたのは、郡山で開催したので郡山地区からの参加者がほとんどであり他地方からの参加が少ないことだった。今後も興味深い企画があれば、自ら参加してみたい。

【教育長】

部局の連携について具体的に進めていくために、既にこども未来局と何度か協議をしている。その中で、従来は県民の日に県庁こども参観デーとして子ども達の県庁見学を実施していたものを、見学だけでなく、子ども達に福島のより良い未来をつくるためにという形で話し合いをしてもらい、私たち大人に提言してもらおう企画を実施したいと考えている所。その際は知事にも出席いただいた上で、私たち大人が子ども達の意見を聴いてあげたいと考えている。このように連携をしながら、できるだけ子ども達の自己実現、発表の場を提供していきたい。

【教育委員】

子ども達の背中を見て感じることは、子ども達は、震災や原発事故を乗り越えようと頑張っている。そこで大事なのが、やはり教育である。ここで福島ならではの教育をすれば、子ども達は大きく成長してくれる。ピンチをチャンスに変えていくべきと考えている。

そのような中で、今回の教育委員会の改革で一番大きな点は、この総合教育会議である。福島ならではの教育を具体的に進めるためには、教育委員会と知事部局が共通のベクトルで教育を行うことが大切である。したがって、具体的にこども未来局や文化スポーツ局と資料で挙げられたような施策を子どもに寄り添った形で実現させていくことが福島ならではの教育であると考えている。正にこの会議が、子ども達の未来を背負っていると感じている。

【教育委員】

この総合教育会議は、知事と直接協議ができるということで、非常に重要だと考えている。復興は、単に元に戻すのではなく、未来へ向けて人を育成していくことが重要であり、そういう意味で知事と認識を共有しながら、未来の福島を担う子ども達の施策について話していければと思っている。

三つの部局の連携については、具体的にどのように進めるのかということについては、それぞれの役割というのがあるが、どうしても縦割りというものが出てくるが、そこを埋めるような関係にならないといけないのではないか。

これまでの意見や説明を聞いた上で考えると、子どもという共通のステークホルダーに対して、それぞれの立ち位置で眺め、どのようなことができるかをまず考える。そうすれば、自分達の守備範囲がここまでだという発想にはならない。そういう意味で、こども未来局長、文化スポーツ局長は、教育に関する目線が同じなので連携がしやすいと考えている。

また、ふたば未来学園高校の開校により、今年は教育の未来に向けての原点だと考えており、三つの部局がこのように集まって協議するのは非常に良いこと。これをきっかけに進んでいけば、よい連携ができるのではと思っている。

【知事】

今回、総合教育会議は全国でスタートしているが、福島におけるこの会議は、法律、制度が変わったから設置した会議でなく、元々本来設置すべき会議だったと考えている。震災から5年目に入り、子ども達の教育をどうしていくのか。県教育委員会に任せてしっかりと進めてもらうことも重要だが、オール福島でどのように子ども達を育てていくのかを真剣に考えなければいけない。したがって、私たちは、元々子ども達のためにこういった会議を設けるべきだったという必然意識を持って参加しなければと思っている。

そのような中、教育委員会とこども未来局が早速連携して、新しい企画を考えていることは良いことだと思う。予算ありきでなく、できるところからスタートをするというのが重要である。今後も連携を活発に進めていただきたい。

また、委員から出た縦割りについても、そのとおりの所がある。各部局が所管の施策をしっかりやることもメリットがあるが、福島の場合は、各所管の間であったり、新しい課題が常に出ているのが現状。その部分を総合教育会議も含め皆で関わっていくのが重要だと感じている。

(6) 議題 4

<復興を担う人材育成について>

資料4に基づき、教育長による説明を行った後、以下のとおり協議、意見交換を行った。

【知事】

意見など順次発言をお願いする。

【教育委員】

議題3の中でも出たが、復興には人材が最も重要。そのため資料4にあるとおり、新たな施策、継続の施策を積極的に行っていく必要がある。

現在、報道でも全国的に取り上げられているふたば未来学園の活用がキーポイントになってくる。ふたば未来学園高校でどういう教育が行われているかということを取り上げ、それが県全体に広がっていく流れをつくっていかれたらと思う。そういう意味では、会津高校でのグローバル人材の育成も大きな意味を持っている。高校からグローバルな世界に飛び立っていく子ども達が出てきて、その子ども達が福島県に戻って復興のために様々なことをするようになっていけたらと感じている。

【教育委員】

震災以降、大きな傷を負った子ども達を癒やすことは、もちろん我々の使命であるが、それ以上に子ども達の心の様子が5つの視点で変わってきたと感じている。

一つは、生命の大切さ。自分達はある意味生かされているということを経験を通して感じているのではないか。二つ目は、自然に対する畏敬の念を持ち始めているということ。三つ目は、家族の大切さ、友達の大切さを身をもって理解したということ。四つ目は、目の前で困っている人がいたら自ら助けてあげたいというボランティアの心を持った子どもが増えていること。五つ目が、いずれ福島に戻って、復興に役立ちたいと思っていること。この5つの変化にどう対応していくかが教育に問われている。したがって、これら子ども達の心の変化を受け止めて、具現化できる機会と場所を提供するのが福島ならではの教育だと考えている。そのために資料4にある様々な施策をしっかりと進めることだが、グローバルな人材はグローバルな所で働くだけでなく、「Think globally, but act locally」というように世界的な視点から物事を考えつつ、地元で何ができるかということ子ども達も模索し始めていると思う。そこに教育の醍醐味があると思っており、資料4で説明があった取組を進め、子どもの様相の変化に応じた対応をすることが福島ならではの教育として生きてくると思っている。

【教育長】

復興に向けた教育というと浜通りでの取組に注目しやすいが、私たちが相手にしているのは、福島県全域の子ども達である。何らかの形で復興に関わりたい、一旦県外へ出て戻って福島のために頑張りたいという思いは、県内全ての子ども達が持っている。私たちの仕事としては、こういう子ども達の思いを実現できるようサポートしていくことであり、そのためにも教育環境の整備はしっかりやっていきたいと考えている。学力の向上というのが、大きな課題ではあるが、それだけでなく、心豊かでたくましく生き抜く人材を育てていきたい。

【教育委員】

震災があつてから、物の見方が180度変わった。どこまでが本当に正しい情報なのか、非常に疑問に思っている。私自身、放射線の知識はなく、その点に関して明確に話せないが、例えばドイツであれば、ゴミの分別の仕方を授業の中で教えるというように、授業の中で復興というか、放射線の勉強など、福島県の子どもは別の枠において、そのような授業に関わってもいいのではないかと思っている。

また、ふたば未来学園高校については、現在は、復興への応援団が色々とサポートしていただいている状況だが、このようなサポートがいつまで続けていただけるかと考えている。せつかく子ども達が、この学校は今までの学校とは違うと自覚している中で、数年後、当初はいろいろなサポートがあつて良かったけどと思われなような取組をしていただきたい。

【教育委員】

復興を担う人材育成ということでは、心の教育が一番重要ではないかと思っている。道徳教育も今後、教科化される中で、最も重要なのは、大人達が率先して責任ある行動を取れるかどうかだと思う。子ども達は、親や大人の姿を見ているので、責任ある行動、背中を見せてあげることが重要であり、そのための大人への教育を考えるのも結果的に子ども達にフィードバックされるのではないかと思っている。

そのためにも郷土愛が重要だと思っており、福島に帰ってくるだけでなく、どこにいても福島のことを思い続けてもらうことが復興へつながっていく。

また、18年後の出生数を考えると今の6割から7割になる。教育を充実させる上で人口減少の歯止めは大事であり、生み育てやすい環境づくりが必要だ。

さらに、女性の力が重要。女性が働きやすい環境づくりも生産性を下げない上で重要な一つだと思っている。

【知事】

復興と子どもの育成の関係で二つの観点でお話をしたい。

まず一つは、ある中学校で、子ども達の発案により、修学旅行の訪問先でデステイネーションキャンペーンの手伝いがしたいという申し出があつたため、観光パンフレットなどを県から送付して、実際に配布をしてもらった。そのように自分達の考えで行動していると周りからの受け止めが違ってくる。後日、訪問先に残っていた余ったパンフレットをその施設の方が自ら配布してくださるようになり、全て配布を終えたので、追加での送付をお願いされたという話があつた。復興のために何かをやろうという子ども達の思いが、周りの方に影響を与えるということを改めて実感した。

もう一つは、福島の子ども達が復興という重荷を背負わされすぎてないかという意見がある。私たちから見れば、子ども達が復興に関心を持って、故郷のためにとってくれるのは嬉しいが、いたずらに重荷を背負わせていないかという心配もある。したがって、子ども達の自発的な思い、やる気は尊重するが、必要以上に負荷をかけないことも大事。子ども達のオリジナルな思いを大切にしながら、配慮もする。この両面が私たち大人の大切な責務ではないかと思う。

【教育委員】

私も子どもに負荷を与えるのではなく、夢をいかに育てあげることだと思ふ。それには、一流のものに触れてもらうことが大きな要素。2020年には東京オリンピックがある。もし新しい種目が追加になって、例えば野球やソフトボールが追加されれば、予選は福島県でやってほしいと思っている。この予選を県内各地の球場でやれば、夢の実現どころか、正に一流のプレーヤーを現実の目の前で見ることができるので子ども達にインパクトが与えられると思ふ。こういう大会の開催で福島の姿を発信できることになり、風評の払拭にもつながって、子ども達の将来の夢の掘り起こしにもなると思ふので、知事と一緒に実現させていきたい。

【知事】

実りの多い協議ができた。知事部局、教育委員会共に今日の協議内容を尊重しながら、一体になって「ふくしまの子どもたち」をしっかりと育てていきたいと思ふ。

以上で、第一回総合教育会議を閉じる。

5 閉会

午後4時16分閉会となった。